

古靱の熊谷陣屋雜感

中野孝一

古靱大夫がいよ／＼新櫓下に決定したときいて、その披露狂言の豫想に心を躍らせた時、まつさきに心に浮んだ曲目は寺子屋と陣屋の二つだけだつた。どちらも私のもつとも好きな時代物の代表的名曲であり、風格の大きい立派な忠義？のために愛子を犠牲にする内容の相似、その上最近の古靱の心境——愛息を一人残らず亡くしてしまつたやりの場のない悲寥感を托するにもつとも適切好箇の語物として

この二つのうちどちらかゞきつと選まれるだらう、と信じ且つ期待したのであつたが、どちらかといへば、私は寺子屋を望むだ。それは寺子屋はもうこゝ暫くきいてゐないといふ理由もあるにはあつたが、それよりも松王丸と熊谷とは同じやうな亡兒痛惜慟哭の至情にも、大分軒輊があつて、熊谷は愛子を計畫的に吾手にかけたといふ、ひどいことをやつてゐる。壽命がなくて先立てゝさへその悲しみは堪えがたいのに、一片の報恩と武士道の面目のため可惜薔の花を散らして退けた親心の悲痛さ、胸を嚙む呵責、寂し

い空虚さは、松王丸に比べて一層苛辣深刻でなければならぬ。こういふ人の世の親心の悲しみを一人で背負つてゐるやうなくるしい熊谷の肚裏を、このごろの古靱大夫に語らせ、「十六年は一昔アア夢であつたなア」などをこの人の口からきかされる事は、あんまり即き過ぎるが故に痛々しい感がしさうで一寸心が進みかねた。

それに寺子屋の方には段切にいろは送りといふ哀切ではあるが、詩的な美しい音楽的快感に陶醉し得られる節奏の滋味がある。これはあゝした悲劇の結末としてはまことにありがたい救ひであつて、松王千代の白無垢姿の憐れさにもかかはらず、惹き入れられるやうな底なしの寂寥感に襲はれずともすむ。陣屋の段切にはそれが乏しいばかりでなく、輪廻流轉の人生の果なき業因について凝視を強ひられ花を惜しめど花よりも惜しむ子を捨て武士をすてで、住むところさへ定めなき熊谷の心事に、もつとも嚴肅な沈思と冥想を強要されるのも一寸心の重荷でもあつたのである。

煙ふ

だが結局本決りになつた狂言は、私の思はくなどにかけるかまひなく陣屋だつた。これは本誌の大西さんからおしらせを頂いてはじめて知つたのであるが、こうなつてみて本心を叩いてみるとやつぱり陣屋の方がよいやうにも思はれてきた。作中の人物の心情と演者の心境とが一等縁故の深いこの曲を忌避してゐた不可解の私の心状は、愛するが故に繪巻といふ、矛盾に似て矛盾でない人性の神秘に共通した心理に支配されてゐたものでもあつたらうか！

閑話休題——

この前津大夫の紋下披露の時には古靱大夫が組討を買つて出て、紋下の語り場に箔をつけてやりその語物を一層立派に重からしめたことがあつた。私はこれを聴きはづしてゐるから古靱が果してどんな組討を語つたか知るよしもないが、紋下問題でゴテた揚句だけに古靱のこの出方は、津大夫からも聴手の側からも感謝さるべき藝道美談として印象されてゐる。こういふよい先例もあるので今度もきつと組討をつけてくれて、織大夫が大隅大夫かと語つてくれるものと一人ぎめして楽しむであつたに、これは見事にあてがはづれて失望した。「末廣がり」といふやうな愚劣な曲目のためにせつかくの期待が裏切られた、おもへばあきらめがつきにくかつた。いづれ松竹の算盤から割り出した暴舉と思はれるが、眞面目な人形浄瑠璃愛好者こそよい面の皮である。

この陣屋は寡聞の私にしては割りに多く聽いてゐる方で一昨年の正月には絶讃の辭を本誌に寄せてゐる。今度きいて一層深味を増した語口とその心熱にすつかり傾倒したものの、それは感服の度合の月盛りが上昇しただけで、かくべつ異つた感銘は享けなかつた。だから大西さんから何か書けと仰せつかつても、屋上屋を架する讃辭のむしかへしは本意でないし、鴻池さんがあれ以來二度もあの方でなければ書けない周到懇切の名評を發表してゐられるし、これ以外私などの今更銚を入れるべき餘地はありさうにおもへないが、責めふさぎに前回の感想と重複しないやうに、例の變痴奇論を御披露する。

古靱大夫は舊臘押しつまつてから歸阪以來、東上中の無理が祟つたか、風邪がこぞれて弱つてゐたさうである。初日に陣屋の始まる前、大西さんに偶然廊下でお目にかゝつた時「仕舞ひまで無事にやれるかどうか案じてゐる」といふやうな悲觀したお話だつたので、近來この人の健康には一入神經過敏になつてゐる矢先とて、暗澹たる氣持で出場を待つたが、晴れの床の第一日——清六と織大夫と三人ずらりと並んだ時の立派さ、光頭燦然として輝き生氣潑刺、微塵さういふ暗い影はなく、洋々たる當流の將來を豫示するが如くにさへ思はれ、頼もしい力強い光景だつたので不安一掃、大に氣をよくしたが、でもオクリや枕がいつもより低聲で陰氣で、莊重雄渾といった風の今までの語り味と

おあすか
床次

新道
のきん
うよこ
おひか
かし

はちと様子の違つたものを感じさせられ、些か劈頭から物足らぬおもひをさせられたが、しかしよく考へてみればこ
ういふ静かな寂しい語り口が實は一番ほんとうなのであつ
て、熊谷の眞情はこれでこそ充分に語り生かされたものでは
あるまいか。これは枯淡の藝境へ這入りかけてゐる藝境
の推移の一端とも思はれる。それにこの出の熊谷の足どりは
鐵石も踏み破る豪毅な武人のそれではない。吾手にか
けて吾子を殺した呪ふべき手に珠數かけて、すつかり打ち
しがれた力ない歩みを陣屋へ運んでゐるのだ。

今一ツは「御批判如何に」について、さまざまの考察
に耽り得る表現の妙に接した事である。この前の陣屋評で
は不念にもこゝを「凜然たる幅ある大きな胸を貫く悲壯味
の絶大峻烈さに讃嘆し」といふやうな認識の足らぬ見當
違ひの讃辭を呈してお茶を濁してゐるが、これは私の心の
至らなさによること勿論乍ら、語り手も今度ほどの味の
深さを語つてくれなかつたものでなからうかなとも思ふ
主命黙しがたく、且つ一片の恩義の枷にしばられて、一
粒種のいとし子を吾と吾手につけてた事についての懷疑と悔
恨と深愁——熊谷の人的自覺と情の自然の發露、さうい
ふもや／＼した複雑な感情がこの一言に裏付けされてゐた
やうに感じ取つたのは私の買ひかぶりであつたらうか？

皇國の興亡をかけた聖戰に大君の醜の御楯となつて散華

するのではなく、私闘のために犠牲となる事は親の身とし
て諦め切れない痛恨事に違ひない。であればこそ戦半ばに
我儘な現世厭離の出家遁世が許されるのである。だから義
經は「それ武士の高名譽れを望むも子孫に傳へむ家の面目
その傳ふべき子を先立て軍に立たむ望は——」などと、安
價な功利的な出陣觀を臆面なく述べ立て、熊谷遁世の辯
とし、餓としてゐるが、こゝにいふ義經の武士道觀にあやつ
られて殺した愛子の首を、敦盛の首として義經の實檢に供
するのだ。熊谷の胸中如何ばかりの切ない悔しい思ひが去
來してゐることであらうか。「御批判如何に」はその首の
眞實の鑑定など乞ふてゐるのでない事はいふまでもない。
無量萬斛の悲しい親心のはけ口をこゝに見出し、これある
が故に無辜の人の子を無慚にころす惡習に、かゝる人間胃
演を敢へてせしむるその根元に向つて、熊谷が必至と放つ
た精一杯の暗示的な抗議なのである。儚なくも悲しい抗議
なのである。しかし古軼大夫はこうまで深刻にひねくれた
解釋をしてゐるかどうか私は知らない。またこゝにいふ行き
過ぎた考へ方はおそらく古典淨瑠璃の鑑賞としては健全な
ものではないだらう。でもあの複雑なふくみの多い表現は
私にこれだけいろ／＼と熊谷の心事について揣摩憶測せし
むるヒントを與へられたのはほんとである。古軼大夫が淨
瑠璃と時代性といふ點について、もつとも適切な示唆と興

古歌大夫か浄なりと時代性といふ以州人未踏の新らしいさ境いひそかに
思ひをひとめてゐるうしい、こゝもこれにちよあつてゐるふしうだね。

味をふくむ對象と見られてゐる所以にまたこゝういふところに潜んでゐるのではあるまいかと考へられる。

ここで「言上す」と大きく言ひ切つて息をグツと詰めてゐて「ヨーシューイツネ」と出た時、舞臺でそのまゝ氣絶しさうにおもつたと、十五年七月の新橋演舞場の素淨瑠璃のそれを鴻池さんが激賞しておいでるが、今度はどういふものか、さうした肉體的苦行の離れ業はやらなかつたかとおもはれた。(初日きく)

息をぬかずにそれでゐてくるしがらずに、悠然として立派に義經の品格と情味とを間然するところなく語り生かしたのに私は却つて驚倒した。これは古歌の藝の完成途上における一ツの進歩でないのだらうか。聴手をはら／＼させる程くるしんでつとめるよりも、さういふ壓迫感を更に與へずに、しかも息のぬけないやうに語る方が上乘ではないのだらうか。

だが實際は息を何處かでぬいてゐるのかもしれない。息をぬかずにあまで充分に語る事は人間業でないやうな氣がする。

この點について鴻池さんの御高教を得ば幸甚である。

最後に眼目の「十六年も一昔ア、夢であつたなア」について再考してみたい。私はこれを陣屋一段の中で、いやおそらく全淨瑠璃中でも、もつとも至難至極のものと思つて

ゐる。おそろくこれほどしみてゝ人間の魂の底から滲み出る獨白、人間味に徹した悲痛な諦めの詞を、清澄單純枯淡な表現に托したものはあるまい。特異な表現形式によるものだけに普通の地合や詞とは違つて、その日の氣分環境、肉體的諸條件などのデリケートな制肘をうけ易く中々厄介なものらしい。私がこれまできいた中でもその日その日でこゝの印象だけはそれ／＼に異なつてゐる。昭和十五年の正月に二日續けて聴いた時にも初日の出來榮の方がすぐれてゐた。今度のと聽き比べてみて前の方を朗唱的、今度のを心理的寫實的とでも分類するとして、よくなければならぬはずの今度の出來が今一ツおもしろくなかつた事についていろ／＼と考へてみたが、それはちと實感が濃くて蒼古の趣に乏しかつたせいではないかと思はれる。この前の時には「谷熊が向ふは西方彌陀の國」以下「ア、夢であつたなア」に至る一聯の述懐歎聲が、活殺なく、濃淡なく、緩急なき詠歎的な朗唱調の吐きで、さとりすました枯淡さでもないが、すくなくとも生々しい感傷は洗ひ上げたものだつたが、今度のは一句々々が心理的に語られ、掉尾の「ア、夢であつたなア」になつて感慨禁じ得ず、思はずそこに低聲ながら力強い感情の色を濃く打ち出してゐる。

私はそこに人間古歌のむき出しの心の姿を察知して不覺の涙にくれたのであつたが、こゝういふ感味―内攻した語口、

あはれ
の激お
と利左
めとさ
あきら
めとさ
とりの
心持ん
揚ぐす

感情に裏打ちせられた表現は、武智さんの御説の如くよい意味での古鞆大夫風であつて、勿論陣屋一段隨所にこの妙があり、私の胸奥に一番激しく觸れたのもこれであつたが感情の氾濫激動してゐない、こゝういふ特殊の心境描寫とも言ふべきところだけは生々しい感情そのものの表出はどうあらうか？

歩下

寂寞の底に一切空と觀じて、諦め切れない未練と執着が心底に沸々としてゐる人間熊谷である。前回の時の述懐が比較的平靜に、そのリズムに感情の起伏の現れなかつたのは、熊谷が意志的に感情を制御してゐるからで、さとりすました落ちつきではなく、女々しい感情は表へ出さないでも、肚の底で泣いてゐるのである。朗々哀々と靜かに口誦む述懐と唱名に、無限の悲調と共にほのかな詩味さへ漂渺として、しかも聴手の肚の底へ煮えこむやうな切實な悲しみと、それでゐて醇乎として醇なる藝術的香味を與へられたあの時の出來榮を追想して讚する事は今度の成績にケチをつけるやうで些か心ぐるしいが、けつしてさういふ意味ではない。これは古鞆の藝の後退を意味しない。藝力の問題ではなく語手の心境が微妙に語物に投影する現象に外ならぬ。それまでかす／＼の心の痛手も時の裁きで醇化された心境にやつと到達した時が一昨年の春のあの時でありそれから日は吾古鞆にとつて一層生きる事の悲しさと難さを骨の髄まで味ひつくした一年有餘の歲月であつた。こ

の人にどうしてあの時の氣持であの通りの物が語れるものぞ——だが今暫し時をおいて、何物にも代へがたい貴重な代價をもつて購ひ得た、深刻な體驗がこの人の血肉にほんとなり切つた時——私たちを堪能せしむるより高次の表現が必ず生れるものと期待してゐる。

それから今一つ特筆しておきたいのは、青葉の笛の件りのすぐれてゐたことと、小次郎の首を抱いての相模の愁嘆の素晴らしかつたことである。いづぞや女義の團司のこれをきいて、「母性愛熊谷陣屋」と名づけたことがあつたが、それは他の人物が香ばしからず、相模一人が光つてゐたのを皮肉つた意味でもあつたが、今度のこの出來はむしろそんなのとは比べものにならない。あんなに美しく情のつんだ、泣かされて氣持のよくなる口説は、めつたときけるものではない。高安博士の御注文にはまつた、一呼吸を休めるスーツとしたよい氣持になれる個所」とはこゝういふところではないのかしらん。如何な古鞆ざらひもこれをきいては宗旨替へをせざるを得まい。

も一ツ書きおとしてゐたが義經の「ア、よくも打つたなア」が、「熊谷の御批判如何に——」に照應する返しごととして、思ひやりと演罪の思ひが溢れていたはりの情味が深かつたのも快い印象として残つてゐる。

(完)